

「大地の歌」（ハンス・ベトケ編“中国の笛”より）：歌詩訳 copyright: ピアチエーレ室内合奏団

第1楽章『地上の哀愁を憂える酒席の歌』（テノール）

金盃に入った酒はすでに我々を招いているが、飲むのは少しお待ちなさい、私が歌を歌うまで！この歌は悲しい歌ではあるがあなたの心に喜びと共に響き渡らんことを…悲しみの近づく時、心の庭園は荒れ果て、喜びと歌は消えてなくなる生は暗く、死もまた暗し

この家の主よ！この家の酒蔵は黄金の酒を蔵している！私の琴はここにある！琴をかき鳴らすことと、盃を飲み乾すことは、似つかわしいことその時にみなみと酒をたたえた盃は、この世のすべての王国に勝る価値を持つ生は暗く、死もまた暗し

天はどこまでも青く、地はどこまでも続き、春にはまた芽吹くしかし君よ、君はどれくらい生きるのか？百年に満たない年月を楽しめど、すべてはこの世におけるはかなき夢

ここから見てご覧なさい月光の降り注ぐ墓地にうづくまる荒々しくも空虚な姿、- あれは野猿！その雄叫びが生の甘き香りに突き刺さるのをお気なさい！さあ、盃を手に取りなさい！友よ、今こそ、その時！一滴も残さずその金盃を飲み乾し給え！生は暗く、死もまた暗し

（李白「悲歌行」による）

第2楽章『秋に独りいて淋しきもの』（アルト）

秋露が湖の表面を青々と漂う草の葉の一枚一枚が玉露でおおわれるまるで名匠が美しい花々の上に翡翠の塵を撒いたよう

（ひすい）

花々の甘い香りは消えていき、冷たい風がその茎を萎えさせ、しおれた金色の蓮の葉がやがて水上を流れていく

私の心は疲れきり、私の灯は幽けき音とともに消え、私を眠りへと誘う私はあなたのもとへむかう、いとしい安らぎの場所よ！平和を与えよ、私は慰めを渴望している

私は孤独の中で、涙にむせぶ心の中に住む秋はあまりにも長く居座り続けている愛の陽よ、あなたが現れてこの苦い涙を、やさしく乾かしてくれることはもうないのか

（銭起「效古秋夜長」による）

第3楽章『青春について』（テノール）

小さな池の真中に佇んでいるのは、緑と白の陶で出来たあずまや

虎の背のような格好の翡翠の橋が、そのあずまやへと伸びている

あずまやには友人たちが、着飾り、酒をかわし、談笑し、なかには詩を綴る者もいる

彼らの絹の袖は滑り落ち、彼らの絹の帽子は愉快的格好でうなじに留まっている

小さな池のおだやかな水面は、すべてを鏡のように逆さに映し出している

緑と白の陶で出来たあずまやのすべてのものが、上下逆さになっている

橋は半月のようにかかり、その孤もまた逆さ。友人たちが、着飾り、酒をかわし、談笑している

（李白「宴陶家亭子」による）

第4楽章『美について』（アルト）

乙女たちが花を摘んでいる岸辺で蓮の花を引っぱっている草の茂みの中に腰を掛け、ひざに集めた花を置き、互いにじやれながら呼び合っている

金色の陽は彼女たちの姿をつつみ、澄んだ水にその姿を反射させる

陽は彼女たちのか細い肢体と愛らしい眼を映し出し、風は煽るように彼女たちの着物の袖をめくり上げ、大気のなかに彼女たちの香りの魔力を漂わす

おお、見てご覧なさい、あちらの岸辺を遠くでもまるで陽光のように輝いている美しい少年達が

、駿馬にまたがり、遊んでいる

緑色の柳の間をぬって頑強そうな若者たちが馬を駆る！ひとりのまたがる駿馬が欣然といなくなぐや、物怖じし、草花の上で蹄を躍らせ突進し、その荒々しい走りで落ちた花を乱暴に踏み潰す

おお！見てご覧なさいたてがみは逆立ちながらひるがえり、鼻からは湯気を放っている

金色の陽は彼らの姿をつつみ、澄んだ水にその姿を反射させる

乙女の中でも最も愛くるしいものが、憧れのまなざしで彼のあとを追うしかし彼女の気位あるそぶりはみせかけ大きな目の火花と、熱いまなざしの暗闇の中に、彼女の胸は哀れといえるほどに高鳴っている

（李白「採蓮曲」による）

第5楽章『春にありて酔えるもの』（テノール）

もし生がはかなき夢であるとしたら、なぜ故に労苦や不安があるのか？私は朝から晩まで、飲めなくなるまで酒にひたろう！

それ以上飲めなくなった時こそ喉と魂が満たされる時戸口へ千鳥足でたどりつき、悠々と眠りにつこう

目覚めに私が聴くものは？耳をすませろ！樹に一羽の鳥が歌っているもう春が訪れたのかと問いかけてみるが、私にはまるで夢のよう

鳥はさえずる「そう、春が来た。一夜のうちに春が来た」深い感嘆の中に鳥が歌い笑うのを聴く

私は再び盃を満たし、最後の一適まで飲み乾して、月が暗い空に輝きだすまで歌い続けよう

そしてそれ以上歌えなくなった時、再び眠りに落ちよう私にとって、春になんの意味があるのか？酔わせておいてくれ！

（李白「春日醉起言志」による）

第6楽章『告別』（アルト）

陽は峰の背後に沈み、すべての谷に夕刻が告げられ、冷気とともに影を落とす

おお、ご覧なさい！月が銀の舟のごとく、天の青い湖上を浮かんでいく松の木の暗い影から、そよ風が漂ってくるのを感じる

夕闇のなかに小川は心地よい歌を歌い、花々は薄明かりの中で青白くなっていく

大地は安息と眠りに息づき、ありとあらゆるあこがれは夢路に入る人々は疲れ果てながら家路につき、忘れていた青春と幸福を眠りの中に再び見ようとする

鳥は静かに樹の枝にうずくまり、世界が眠りにつこうとする…

この松の木陰にも冷たい風が吹いている私はここで友人を待っている永遠の別れを告げるために

おお友よ、君のかたわらで、今宵の美しさをゆっくりと味わいたい君はどこにいるのか？すでに待つこと久しい！

柔らかい草でふくらむ道を、私は琴を持ったままさまようおお美よ、世界は永遠の愛といのちに酔っている

彼は馬から降りて別れの盃をさしだす彼は訊く、どこへ行くのか、なぜ行かねばならぬのか

彼は話すが、その声は曇りかすむ友よこの地で幸運は私に微笑まなかった私はどこへいくのか？山中でさまよってみようこの孤独の心を満たす平穩を求めて…故郷を、そして棲家をさがしてさまよってみようそれは見知らぬところではないだろう私の心は落ち着いていて、その時を待っている

いとしきこの大地のすべてが、春になって再び芽吹き、緑を新たにする！どこまでも、永遠に、かなたには青い光永遠に…永遠に…永遠に…永遠に…永遠に…永遠に…永遠に…

（孟浩然「宿業山房期丁大不至」および王維「送別」による）

※ 注記

この訳詩の著作権は全て翻訳者である当団：白崎氏及び当団に帰属します。

従いまして無断転載・引用はご遠慮下さい。
ピアチエーレ室内合奏団